

## 書評

## 安田章生著 『日本詩歌の正統』

西 畑 実

和歌史の研究は、一般的にいつて、実作にほとんど携わらない人々によつて遂行されて来た観がある。なるほど、外面的事象の調査に限る限りでは、たしかに精緻を極めていられるけれども、和歌作品そのものの理解（和歌を和歌として把握すること）において、欠けるところがまつたくなかつたといえない。

もとより、研究者が実作者でなければならぬ必然性はどこにもないのだが、「和歌史をいかにとらえるかということ」が、「和歌研究家と短歌実作者とをつなぐ一つの橋」だということに思いをいたすならば、研究と同時に、すぐれて実作をもなし得るものの方が、より深く和歌作品の本質に迫ることが可能なのではなからうか。この推測はおそらく正しいであらうし、じじつ、また、本書の内容がそれよりも雄弁に物語っている。

この書物は、「あとがき」にあるように、「日本詩歌の正統の問題に触れる文を集めたもの」であり、三部にわかたれる。才一部には、主として、日本詩歌における伝統・正統論

を、才二部には、和歌史の研究および作家論を収め、才三部においては、現代歌論に関する論説が纏められている。これらのうちで、代表的な論文を挙げてみると（括弧内の年は執筆年次を示す）、「万葉集と近代」（昭和二十四年）、「短歌における知的抒情」（同二十六年）、「知的抒情論の成立」（同三十年）、「和歌史論」（同三十六年）、「日本詩歌の正統」（同三十七年）、「短歌の正統とは何か」（同三十八年）ということになるであらう。周知のごとく、安田章生博士は、才二次世界大戦後の混乱期に、知的抒情という作歌理念を提唱され、現代短歌のあり方に大きな問題を投げかけられたのだが、上記の論考もまた、そういう理念を探求もしくは確認する過程における産物にはかならないのである。知的抒情ということは、和歌史の確固たる見通しのうえにたつての発言であつたが、いったんそれが確立されてからは、逆に著者に働きかけて、以後の思索の方向をも規定しているのだといえる（それは、各論文の執筆順序からも確かめられるであらう）。かように、探求と実践とが、いわば因果関係

をなしつつ深められていることは注目に値するし、本書の特色もまたそこにあると認められる。

いうまでもなく、知的抒情という作歌理念は、抒情喪失の知性主義ないしは散文主義、主体不在の写実主義もしくは現実主義を克服、止揚する方法として提示されている。それは、近代短歌を支えていた方法論（『万葉集』に和歌的規範を見出すアララギリズム）に対する反論の形で打ち出されているのであるが、そういう現代短歌の基本的性格が現実環境と応和していることを反省する態度が、新しい「歴史的感覺」による和歌史の把握へとつながってくるのは当然だといえよう。そのことは、また、現在の時点を「より正確に」とらえる便りともなる。安田博士は、こういう見通しのうえに立つて（巨視的に展望するために）、古代、中世、近代というふうな時代区別を採用しておられる（そのような掴み方をされたのは、日本詩歌の基本的性格に対する鋭い洞察と密接に結びついているのである）。

和歌史を三分してとらえる方法は、一見したところ、みづから述べておられるように、大掴みに過ぎるかもしれない（もつとも、必要な場合には、それをさらに細分する——例えば、古代を大きく二分して、古代前期と古代後期とに分けるというような——ことも容認しておられるけれども）。しかし、それぞれの時代を代表する撰集（特に、古代および中世における）の歌風の特徴を考察するとき、その境界線を平安時代中期の頃と、江戸時代初期の頃に引かれたのは、穩当

であるばかりでなく、和歌文学の特質に触れた卓見だといえる。

それでは、安田博士をして、このような三分法をとらしめた和歌作品の基本的性格とは、いかなるものかというに、次のような条件を充足するものとされる。才一に、その歌が、現実体験に密着して、即興的に作られているかどうか（発想法の問題）、才二に、作者の人間感情が、作品の上どの程度あらわれているか（純粹抒情の問題）、才三に、いわゆる心と言葉——内容と表現とが短歌形式のなかで容易に調和しているか（芸術的効果の問題）という点に、それは見出される。そういう観点に立つての和歌史論が、これまで見られなかつただけに、極めて新鮮なビジョンに富んでいることはいうまでもないにしても、そこに、実作者ならではの透察力が光っていることは、さらに注意されねばならない。

古代和歌の特色は、歌集でいえば、『万葉集』の歌風（なにかんずく、柿本人麿の時代までの）によく顕現しているが、それは、発想法が即興的であつて、抒情がよく透つており、作者の人間像が相当に投影しているのに加えて、内容と表現とが緊密に融合しやすいという点にある（『古今集』は『万葉集』に比して、より觀念的であり、かつ、知巧的ではあるけれども、基本的な性格において、近似しているとされる。この見解は、近代万葉派の『万葉集』観もしくは『古今集』観の底の浅さをあざやかに衝いており、近代短歌の性格を示唆するという意味において、すこぶ重要な問題を提示して

いるように思われる)。ところが、平安時代中期以降になると、かかる古代和歌の性格のすぐれた作品がでにくくなる。つまり、心と言葉とが一首の中でしつくりと調和しなくなつたのである。それを超克する方法論は、藤原定家を俟たねばならなかつた。その歌の特長は、構成的で、現実体験に即して作歌されず、作者の人間像は作品の上にはほとんど影を落さないがために、実情的ではなく、唯美的な傾向が強い（定家の作風については、「藤原定家」に詳しく説かれてゐる）。こういう定家の歌風が「新古今集」の主潮をなしているのだ（しかし、実情主義的な発想法にもとづく作品が、まったく跡を絶つたというわけではない。写实的、実情主義的方向を重んずる流れも確かに中世和歌に認められる）。定家の歌はまさしく「非リアリズム」に沿つた詩であつた。ここでは、現実を超えたものへの志向が強く見られ、象徴の域にまで到達した作品（連想によるイメージに強く支えられてゐる）が多く見られると同時に、思念が抒情の底に深く沈着する傾向をも示しているのである。だが、このような中世和歌の性格は、近代に入ると漸やく否定され、「万葉集」復興の掛声のもとに、「リアリズム」の線に沿つた詩が復活するに至つた（それが見事な成果を挙げたのは、明治の和歌革新以後、特に大正期においてである）。ここにまた、古代和歌の基本的な性格を形成する、写実主義のもしくは実情主義の発想法が蘇つたのだといえる。そして、この「もつとも近代のな近代ともつとも古代的な古代とが結びついた」作歌理念

が、敗戦に至るまで、歌壇に大きな影響力を与えていたのである。（明治以降における「万葉集」受容の系譜については、「万葉集と近代」において、精密な考察がおこなわれているが、それに作品的典型を求めめる歌論に対する批判が、知的抒情論を成立せしめたという事情を想起するとき、この論文の有する意義は大きいといわねばならない）。

以上で本書の圧巻たる「和歌史論」の見解をあらあら紹介してきたわけであるが、ここで、とりわけ注意を惹くのは、左のごとき指摘である（これは繰返し主張されてもゐる）。

現実体験に密着して、即興的な発想のもとに、心と言葉とが、詩のリズムのなかで、容易に調和すること、心と言葉とは、根本的には、作者と作者をとりまく現実環境との間に、めでたい調和が存在するという事に起因してゐる。

そういう意味で、抒情詩にとつて、もつとも幸福な時代は、古代前期（「万葉集」時代）および近代後期（「万葉集」追隨時代）であつた。しかるに、中世は、作者とその生活環境とが容易に応和しがたくなつていた時代——「新古今集」と「風雅集」という二つの高い峯を存立せしめた——にもかかわらず、詩歌の抒情性は、あやうくも保たれ続けていたように見受けられる。現実体験に即した、実情的発想法を、詩作と自己の生活を一元化した西行法師に見ることができるとは、（ただし、それは、世を捨てた西行にして、初めて可能であつたのだが）。同様な現実主義的傾向は、「新

葉集」においても窺えよう（これも、南北朝動乱期を生きぬかねばならぬ廷臣たちの運命観に支えられている）。中でも、後者は、中世和歌史上における特異な存在であるにもせよ、中世という抒情の困難な時期に、ともかくも、現実には密着しつつ、感情をいきいきと表出している点、いまだ少し顧みられてもいいのではあるまいか。それにしても、実情をありのままに表現しようとする態度は、対象に忠実であり、受動的であるだけに、もつとも抒情性を湛え得るけれど、いつたん生活環境が危殆に瀕すれば、たちまちその純粹性を喪失してしまふことは明らかである。そういうところで、主体性（抒情精神といつてもよい）を回復しようと思つても、写実主義的方法を金科玉条とする短歌美学は、すでに光輝を失っている。現代短歌は、いわば、こうした「和歌史の谷間」に置かれているのだ。ここに、かような状況から脱出するには、いかなる作歌方法に拠ればよいか、当面の問題となつてくる。そういう時にこそ、和歌史への展望を行うことによつて、「古代から中世へと継承された日本の詩歌の正統を認識し、それを現代に受けつぐことが大切」だとされる（「日本詩歌の正統」「短歌の正統とは何か」）。さらに、和歌史の立場からみて、「今後の歌が、近代短歌のリアリズムを超越するという意味において、いわば、中世和歌の性格を強めていくであろう」と想像されているが、恐らくそのとおりであるうし、「近代短歌のリアリズムを超越する」知的抒情論もまた、かかる探究を経て、ますます理論的支柱が強固にな

つたことは自明である。

単なる知性でも単なる抒情でもないもの、抒情と不可分の相関関係において知性が存在し、知性と不可分の相関関係において抒情が存在しているもの——知的抒情こそ、もともと詩というものの本質である、というにとどまらず、とくにこんにちの詩が必ず持たねばならぬ特質であるといわねばならない。

まことに、詩というものの本質を説いて、間然するところがない。また、この知的抒情を達成するためには、「対象に素直に随順するといふのではなく、対象を知性で照射し、そこから得た、知性で濾過された感動を、表現本来の精神を生かして、表現」しなければならぬ。そうして、はじめて、「われわれの感情と同時に知性をも感動させ、感動させることによつて、読者をも知性と情念とが真に融合した世界——もつとも人間的に美しい世界——へと引きあげることができ」るのである。

知的抒情論は、戦後の短歌の現状に対する、実作者としての痛切な不満から出発したのであつたが、真摯な探究、実践を重ねて、理論的に深化された。日本詩歌を語るものにとつて、このような作歌理念を生ぜしめた史的背景を把握していることは、非常に有益であろう。和歌研究家にとつても、短歌実作者にとつても、この「日本詩歌の正統」は、こよなき指針となるに違いない。（四六判二五二頁 定価五〇〇円 大阪市北区樋上町四五 創元社刊）